

スパダリホストと溺愛子育て始めます  
愛されリーマンの明るい家族計画

# 登場人物紹介

CHARACTERS



あいこ先生

空と累が通う保育園の  
夜勤担当の保育士。  
園児たちを優しく見守る。

高比良累

空と同じ保育園  
「ほしざら」に通う。  
空のことが大好き。

朝羽直将

彩人が勤める  
ホストクラブの同僚。  
彩人をライバル視する  
情に厚い男。

久世忍

彩人が勤めるホストクラブの同僚。  
謎めいた雰囲気だが後輩思い。

早瀬彩人

壱成の中学時代の同級生。  
異父弟の空を  
ひとりで育てながら、  
高級ホストクラブに勤める。  
自分の感情には素直。  
明るい性格で  
悩むより行動派。

早瀬空

彩人の年の離れた弟。  
二十四時間制の保育園  
「ほしざら」に通う。  
素直で明るい性格。

霜山壱成

教育関連企業に勤めるサラリーマン。  
温かな家庭を築きたいが  
EDに悩んでいる。  
真面目で優しく、  
困っている人を放っておけない。

## 目次

スパダリホストと溺愛子育て始めます  
愛されリーマンの明るい家族計画

番外編 初めての夏祭り

スパダリホストと溺愛子育て始めます  
愛されリーマンの明るい家族計画

## プロローグ 恐るべき疑惑

「……はあ、今日もダメだった……」

握りしめていた薄ピンク色のメンバーズカードに目を落とし、俺は長い長いため息をついた。なけなしの勇気を振り絞って初めて訪れた風俗店『ふわとろピーチ』。プロがいる店に来れば、長年にわたって俺を苦しめ続けているとある悩みが解消されるのではないかと希望を抱いていたのだが……

——今日こそ、イケると思ったのに……

俺の名前は霜山壱成。しもやまいっせい。二十五歳。

東証一部上場の教育関連企業に勤めて三年。真面目な勤務態度と爽やかな笑顔に定評のある、営業担当サラリーマンだ。

十連勤の激務を経て、ようやく辿り着いた休日である今日、むらつと沸き上がった性欲に身を任せ選んだAVは俺好みで、文句なしにエロかつた。自分の右手でならばなんとか勃起する不甲斐ない分身も、いつになく元気だったんだ。

この気分をもつてすれば、女性にイカせてもらうことができるかもしれない。今日という今日は、

自分がED (erectile dysfunction' つまり勃起不全だ) かもしだれないという恐るべき疑いを晴らせるかもしれない……そう信じて、ドキドキしながら風俗店の扉をくぐった。

だが、結果は惨敗。色っぽい風俗嬢にいくら扱ってもらつても、俺の分身はぴくりとも動かなかつた。

気を遣つたらしい嬢は『疲れてるんですね～。お仕事何されてるんですか～？』と雑談を繰り広げはじめ、ぴつたりとくつきながら取り止めのない会話をしてくれた。会話の最中もしこしこと手で擦つてもらつたけれど、やはり俺のナニはぴくりとも反応しない。

そしてあえなくタイムアップ。嬢は引きつった笑みを浮かべながら軽く手を振つて、『忙しくても、ゆっくり寝たほうがいいですよ。またチャレンジしに来てね♡』と言い残し、俺の前から去つていった——

いつだつてこうだ。リアルな女性を前にすると緊張して、俺の息子はまるで役に立つてくれない。股座にただぶらさがつてしているだけのそれを見下ろしながら、俺は涙を堪えて唇を引き結ぶ。

ナニが勃たないということはつまり、彼女ができるてもセックスができない。つまりそれ以上進展せず、結婚ができない、そして子どもを作ることもできない……『いくつか自分の家族を持つ』ことに強い憧れを持ちながら成長した俺にとつて、この現状は耐えがたいほどの苦しみだった。

だが幸い現代医療は優秀で、性交渉ができないとも、子どもを作ることはおおむね可能だ。だが、まずはそういう俺を受け入れてくれる相手を見つけねばならないのだが……ここも、かなりハードルが高い。

贊沢を言うようだが、俺とて女性ならば誰でもいいというわけではない。共に家庭を作る相手なのだ。互いに人間として好ましく思え、尊敬できる部分を持ち合える相手でなくしては、『家族』を維持していくことは難しいだろう。

「……はあ」

認めたくはないけれど、認めざるを得ない。疑いようもなく、俺はインポテンツだ。

自慰でしか勃ち上がるとのできない、軟弱でかわいそくなべニス。男としての機能を果たせない自分を、何度も役立たずと責めてきたことか――

出会い系やきつかけがないわけではない。自分で言うのもなんだが、俺は女性に好意を寄せられやすい容姿をしている。

表情豊かな二重まぶたの瞳と、整った目鼻立ち。清潔感を意識して短く整えている黒髪や、日に焼けにくい白い肌とあいまって、学生時代は『美少年』と評判だった。

届託なく元気いっぱいに過ごしていた少年の頃から、容姿を褒められるることは多かった。調子づいた母親が、某アイドル事務所に履歴書を送ろうとしたこともあつたらしい。それを父親に阻止されなければ、俺にはアイドルの道を歩むという未来もあつたかもしれない。

成人した今、身長は一七三センチ。そこまで長身にはなれなかつたけれど、小中高と水泳で鍛えたおかげで、すらりと引き締まつた細マッチョに仕上がつた。

幼い頃から『かわいい、かつこいい』と持て囃<sup>はや</sup>されながら成長した上、身体能力も脳みそのほうもそこそこ優秀だつたこともあり、俺に女子にモテなかつた時代はなかつた。

そのため、モテ度に比例してプライドのほうも右肩上がりに成長した。――多分、それが良くなかったのだろう。

中学三年生の夏、まず第一の挫折が訪れる。  
夏休み前に付き合いはじめた彼女は学校一可愛いと評判で、俺にとつてこれほど自分に似合いの女子とはいえないと思える相手だつた。

しかも彼女は処女だが積極的で、スキンシップもすごく大胆。親の留守を利用してイチャイチャを楽しみ、そのまま良いムードに突入。これで脱童貞だ……!! と意気込んだ、大一番のその瞬間――俺のペニスは、しおしおと萎<sup>な</sup>えた。

焦つた。大いに焦つた。いざ挿入というシーンで、突然の失速。こんなにも情けないことがあつていいわけがない。この俺、モテ男の霜山壱成に、そんな失態があつてはならない……!!

さらにそう思い詰めたのが良くなかった。いくら自分で扱<sup>じ</sup>いてみても、萎<sup>な</sup>えたナニは復活せず、俺の背中には嫌な汗が伝うばかり。彼女の表情は気まずげで、重々しい空気が俺たちの間に漂つていた……

その時彼女は『大丈夫だよ～緊張してるんだよね、気にしないで』と引きつった笑みを浮かべつづフオローしてくれたけれど……結局、次の日フラれた。その後『霜山はインポ』という噂が女子の間でまことしやかに流れることを、俺はよく知っている。

傷ついた俺は、少し遠くの高校を受験した。あの失態を知つてゐる人間がいない場所に行きたかった。くしくもそこは、県内一の難関校。俺はがむしゃらに努力して、見事新天地を開拓した。

……が、歴史は繰り返すものだ。

再び彼女はすぐにできたけれど、いざという瞬間に俺のナニは萎なえてしまう。

プライドの高さと、失敗を恐れるが故の緊張感が良くなないのでと独学で学んで気づいてはいたが、知識を得てもどうにもならない。セックスは相手があつての行為なのだ。

勃たない俺を丸ごと受け入れてくれる相手——真実を告白しても、共に乗り越えようとしてくれる相手と出会えたなら良かつただろう。だが、『カツコいい霜山くん』に惚れた女子の前で『俺、インポなんだよね』だなんてことは、口が裂けても言えなかつた。

……恥ずかしい、恥ずかしいにも程がある。

そして俺は失敗を繰り返し——女子の間で、またしても『霜山はインポ』という噂が密かに流れた。それは当然男子生徒の耳にも届く。俺のプライドは打ち碎かれた……

大学生になり、またしても新天地に辿り着くことができたけれど、その頃には、俺は恋愛を自ら禁じていた。

これ以上黒歴史を積み重ねて何になる。恋人を作らないでいれば、俺はずつと『カツコいい霜山くん』でいられるのだ。そう、恋人を作らなければいい。そう決意した俺に、現代社会は優しかつた。

今は『恋愛しない男女』がとても生きやすい社会になつてはいる。独り身でいたとしても、誰も俺を哀れみはしないのだ。

だが、俺自身は恋愛を求めてはいる。というよりもその先の未来に、『自分の家族』を作ることを

切望している。

ごくごく平穏で当たり前の家族を作りたい。俺を育んだ家庭のような、幸せで普通の家庭を——と、言いたいところだが現実は残酷なもので、俺が中学一年生の頃、『幸せな家庭』は脆くも崩壊している。父親が会社の部下と浮気をしていたからだ。

父に裏切られた母親の怒りは凄まじかつた。感情を隠してニコニコしながら父親の行動の裏を取り、ここぞというタイミングで離婚を突きつける——優しく美しい母が見せた般若はんにやのような顔を、俺は一生忘ることはできないだろう。

幼い頃経験した家族での楽しい思い出全てが、虚構だとは思いたくない。

だからこそ、俺はこの手で穏やかな家庭を築きたい。優しい妻に可愛い子ども。女の子より、男の子が欲しい。一緒にスポーツをしたり、酒を酌み交わしたりしてみたい。

完璧で幸せな家庭を、この手で作り上げてみせる——  
と、心に決めていたのに、このザマである。

「……そろそろヤバイな。まじで病院行くべきだよな……」

頭ではそうわかっていても、俺にとつては高い高いハーダルだ。相手が変われば、状況が変われば、この柔らかなペニスにも力が宿るのではないだろうか……と、なけなしの希望に縋すがつてきた。だけど、結果はいつも同じだ。

「結婚したいしな……。はあ……病院、探さないとだよな。……うん」

メンバーズカードを目につけたゴミ箱にぽんと投げ入れ、俺は小さくそう呟く。  
繁華街のネオンが、滲んで見えた気がした。

## 第一章 十年ぶりの再会

俺は通信教育を提供する企業、『エデュカシオ』に勤務している。高校、大学と、黒歴史を忘れるために学業や就活を頑張った結果、世間的にも知名度の高いホワイト企業に入社することができた。

俺の担当は、大学受験向け教材の作成だ。だが、ここは内勤ばかりしていられるような部署ではなく、教材の監修に関わるお偉い先生方とスムーズに仕事をするべく、接待や営業にも回らねばならない。

そして今も尻を撫で回されながら、俺はひとりの酔っ払い男をタクシー乗り場へと導いているとこだ。俺はさほど酒に強いほうではないため、普段は酒二、チエイサー八くらいの割合で接待を乗り切っているのだが、今日は東峰大学の西内伴次郎教授にしこたま飲ませてしまつた。

この宴において、俺は権力を持つ者をもてなす側の人間だ。しかも今日は、西内の古希を祝うための宴会だった。主役に煽られるままに酒を飲み、店員への注文をこなし、褒めちぎって愛想笑いをする——その場のノリに流されて、あつという間に数時間が経つていた。

「さ、タクシー来ましたよ。西内先生、しっかりとしてください」「いや～飲んだ飲んだ～。霜山くんねえ、わしはもう歩けんのだが……どうだい、このまま」

「あはは、何おっしゃつてるんですか！　さっき奥様からお電話あつたばかりでしょ～？」

「まあそう硬いことを言わないで。……ほら、次からもいろいろ、取り計らつてあげるから。ね？」

「う」

むぎゅ、とスラックス越しにきつく尻を揉まれた。この程度のセクハラには慣れているとはいえ、やはり不快なものは不快である。

おぞぞぞと背筋を粟立たせながら、内なる俺はスケベ親父の胸ぐらを掴んで往復ビンタをかましている。だが、現実の俺は理性的だ。につこりと愛想笑いを浮かべ、さりげなく西内の手首を掴んで尻から外すと、呼んであつたタクシーにそのまま押し込んだ。

西内も、酔っ払つていなければそこそこ尊敬に値する人物だと言えなくもない。だが酒が入ると、とにかく面倒なセクハラ親父と化してしまう。そのため、立場を忘れて妙なおいたを働くかないと、俺のような若手がお守りをせねばならない。女性社員は一次会でとっくに逃げた。

最初の懐石料理の間はきつちりと着こなしていた和服だが、今やそれは見る影もない。裾をだらしなく乱してステテコを露わにし、真っ赤な顔をしながら「霜山くん、ほらあ君も乗りなさい！このわしの言うことが聞けないのかッ！」と怪しい呂律ろれつでシートを叩く西内の言葉を華麗に聞き流し、タクシーの運転手に行き先を告げた。

そして懇懃いんごんに頭を下げる、『この度はおめでとうございました。お気をつけてお帰りください』と告げ、夜の街を駆け抜けるタクシーを見送ったのである。

「……クソ酔っ払いめ」

これまで顔面に貼り付けていた好青年的な笑顔を一旦外すと、社内でも評判の爽やかイケメンフェイスが虚無になる。

俺の容姿は、社の内外でも評判らしい。入社して三年目の今はだいぶ落ち着いてきたけれど、入社したての頃は、日々女性社員たちから視線を集めていた。どちらかというと童顔な俺は、年上の女性社員たちに特に人気が高いらしく、熱烈なお誘いを受けることも稀まれではなかつた。ため息をつきつつ、ネクタイをぐいと緩める。スーツからは酒の匂いや香水のきつい香りが漂つて、それだけで気分が悪くなる。

「……うえ……気持ち悪い」

緊張から解放された途端、肉体は素直にアルコールへの拒絶反応を示しはじめた。ひと氣もまばらになりはじめた夜の大通り、電柱にもたれかかってしゃがみこむ。

ごつごつとしたアスファルトの冷たさが足元から這い上がる。トレンドコートだけでは肌寒いほどの夜だ。このままここで休んでいては、確実に風邪をひいてしまう。

——俺もタクシー、拾わないよ。金かかるけど……もう歩けない……

立ち上がりつてタクシーを捕まえようにも、身体が重くて動かない。微かな目眩を感じつつも脚に力を入れようと頑張るが、一度重力に負けてしまった身体は言うことを聞いてくれなかつた。このままここで夜明かしする羽目になるのだろうかと絶望的な気分になりながら躊躇うすまつていると、不意にぽんと肩を叩かれ、仰天する。

「お兄さん、大丈夫？」

すわ職質かと思ひ慌てて後ろを振り返るも、俺を見下ろしているのは愛想笑いを浮かべた警察官ではなく、スーツ姿の背の高い男だった。

夜の街に映える栗色の髪も華やかな美形だ。鼻筋の通つた端整な目鼻立ちで、斜めに流した前髪の下に、切れ長の双眸がきらめいている。

身に纏うのは、俺のような一般人が着る地味なスーツではなく、見るからに高級なスーツ。時計やピアスも、夜のネオンに似合いのきらびやかさだ。おそらくホストか何かだろう。潰れかけた酔っ払いに優しく声をかけるとは、なんと紳士的なことだろう。……いや、そう見せかけておいて、こつそり金品を強奪するつもりかもしれない……などと邪推しつつ、俺は無事をアピールすべく手を上げた。

「だ……大丈夫です、大丈夫……」

「顔色悪いっすよ？ 立てる？」

「いやほんとに、大丈夫なんで……」

いかん、あまり呂律ろれつが回つていない。身動きみじゆきするたびにぐるぐると視界が回る。俺はこみ上げる吐き気をぐつと堪えた。

だが、差し出された男の手首から香つた涼やかな香りに刺激されてか、少しばかり気持ちがしやんとする。白く長い指は、爪の先まで形が良い。ボリューム感のある指輪も、手首に巻きつく時計の高級感も、全てが嫌味なく様になつている。

「ほら、ここ掴まつて」

「あ、はあ……すみません、わっ」

「危ないっすよ、こんなところで休んでちゃ。スリとか痴漢とかいろいろ出るんだから」「はあ……」

間の抜けた返事をしているうちに、男は俺の手を掴み、力強く引き起こす。

俺は勢いに負けて、男の胸にもたれかかつてしまつた。

セクハラ親父の相手をしていた時はあんなにおぞましく感じた男の身体だといふのに、肩を支えられながら優しく語りかけられると、心地良さに眠つてしまいそうだ。

顔の良い男は声まで良いのか、さぞかしアツチのほうもご立派なのだろうな——などと卑屈な感情に支配されつつも、頬に触れるスーツは滑らかな質感で、いい匂いがして……なるほど、こうして女たちはホストに墮ちてゆくのかと俺は悟つた。

「ここよりも向こうのほうがタクシー拾いやすいんすよ。捕まえましようか？」

「えつ……？ い、いえ……ほんと大丈夫ですんで」

「でもほら、具合悪そうだし……つて、あれ？」

どういうことだろう。突然顎を掬すくわれて、顔面の方向転換をさせられる。ほんの十センチほどの距離でしげしげと顔を見つめられ、俺は呆気に取られた。

「あれつ、ひょつとして……亜成？ 霜山亜成？」

「……へ？」

いかにも自分は霜山亜成だ。が、どうしてこの男は自分の名前を言い当てたのだろう？

訝しさ満点で目を丸くしていると、男はクールに整った顔をパッと輝かせ、俺の肩を両手で掴んできた。

「俺だよ俺！ ほら、中三の時一緒にクラスでさ！ 文化祭ですんげ盛り上がりたじやん!? 彩人だよ！」

早瀬

「早瀬、彩人……？」

「えー、うつそ覚えてねーの？ ほら、ジャンケンで負けてさあ、一緒に実行委員やつたろ！」

「中三……つて、あつ」

俺の記憶に、遠い過去の記憶が鮮やかに蘇る。

忙しくも変化の乏しい毎日を過ごすうち、若かりし頃の思い出などすっかり記憶の底に沈んでいた。

惨めな自分をひた隠しにしつつも、青春を謳歌（おうか）している振りをしながら学校生活を送っていたが、中三の秋に行われた文化祭だけは特別だった。

とても楽しかったのだ。普段接点のない生徒たちとひとつの目的に向かい、青春を分かち合うことができた楽しい思い出――

「……思い出した。彩人だ、うわ、すげえ、十年ぶり？」

「やつと思い出したのかよー！ ははつ、十年ぶりとかやべーな、すげー偶然じやん！ 何やつてんのこんなどこで？」

「うん、接待……。ちょっと飲みすぎて、気持ち悪くて」

ホストの顔をしていたのに、急に男子高校生のようにはしゃいだ表情になる彩人だ。人懐っこい笑みを浮かべる彩人の表情が懐かしく、俺もようやくへらつと口元を緩めた。だがその時、彩人の背後に、派手な若者集団がわらわらと近づいて来たではないか。綻びかけていた俺の表情、再び引きつる。

「アヤトさん、どうしたんですか？」

「はやく肉食いに行きましょーよ」

「誰つすか、そのリーマン」

誰も彼もがビシツとしたスーツに身を包み、身体のあちこちにまばゆいものを身に附けている。派手だ。

そんな彼らは彩人がかまつている相手、つまりは俺を見て、一斉に刺々しい顔をした。

「おいあんた、アヤトさんに何か用？」

「……はつ？ いや、俺は」

「客の旦那かなんかすか？ アヤトさんにいちやもんつけてやがんだつたら、俺ら……」

「違う違う」

彩人は若いホスト集団の視線から俺を庇うように前に立つと、先頭にいた若い男の額を軽くデコピンした。

「いつて！」と呻く若者は見事なウルフカットで、どこのビジュアル系バンドのヴォーカルかと見

紛うほどに攻めた外見である。

「お前らなあ、いちいちそんな突つかかり方してたらダメよ？ ホストとして働いてる以上、お前らは店の看板背負つてる大事なキャストなんだ。チンピラじゃあるまいし、いちいち絡んだりするんじゃねーの」

「……サーเซン。つい」

——なるほど、本当にホストだったのか……

納得しつつ、若人をたしなめる彩人の背中をそっと見上げる。やり取りから察するに、彩人は店の中でもそこそこに立場のあるホストなのだろう。

彩人は俺のことを「彼は昔の友人で、久々の再会なんだ」と説明した。すると若ホストたちは俺にまで頭を下げ、素直にぞろぞろと深夜の街へと消えていく。

安堵した瞬間かくんと膝から力が抜け、思わずもう一度へたり込みそうになってしまった。

だが、素早く彩人に抱き留められ、アスファルトに頭突きすることは免れた。

「あ、ごめ……」

「おいおい……フラフラじやん。大丈夫かよ」

「ん……なんとか、なんとかなる……」

「なんともなんねーだろこりや。お前んちどこ？」

俺の住むアパートは、ここからタクシーで三十分ほどかかる場所だ。電車に乗れば十分程度で着く距離だが、とっくの昔に終電は終わっている……と説明しようとしたが、頭痛と眼氣でうまく口

が回つてくれない。

まぶたは重く、頭はズキズキと痛み口はカラカラに乾いていて、最悪だ。紛れもない

一日酔いだ、最悪の気分すぎる……  
べつたりと眼球にへばりついているまぶたを、ゆっくりと開く。  
するとどういうことだろう。視界の中に、見知らぬ子どもの姿が見えるような気が……

「え……誰……？」

「だれって、そっちこそだれ？ にーちゃんのともだち？」

「……にーちゃん？」

好奇心の強そうな、くりくりした目の男の子が、俺の胸の上に乗っている。息がしにくいのはこのせいか。

茶色みがかつた大きな目や、子どもながらに整つた目鼻立ちには見覚えがある。どこで見たんだつけ……と目を細めていると、男の子は俺の胸の上に乗つかったまま、突然大声を出した。

「にーちやああん!! おきた!! おきたよ!!」

「ううつう……やめて、でつかいこえやめて……」

「にーちゃん!! ねえきいてる!! しんでなかつた!!」

「……うう、しんでない……」

元気いっぱいに兄を呼ぶ声が、ガンガン頭に響いて氣絶しそうだ。のろのろと重たい腕を持ち上げて耳を塞<sup>ふさ</sup>ごうとしたその時、開け放しのドアからひよいと彩人の顔が覗く。

「あ、起きた? おはよ」

「……おはよ……あの、ここは」

「俺んち。壱成さあ、昨日あのままぶつ倒れたんだよ」

「あ……そうだつけ。すまん……」

「いーって。顔洗えるか? おい空<sup>そら</sup>、いつまで乗つかってんだよ、降りろっての」

「えー」

そら、と呼ばれたちびっこは、ようやく腹の上から降りた。だが、なおも食い入るように俺の顔を見つめている。

彩人によく似た大きな目で、じーーっと俺を觀察する眼差しに、へらつと笑つて応えた。

「……え、ええと……そらくんていうんだ」

「うん。おまえのおなまえは?」

「お前……。ええと、霜山壱成と申します……」

「しもや……いつせー?」

「そう、壱成」

「ふーん。にーちゃんのともだち?」

「友達……なのかな。うーん 同級生……つていうか」

「? ふーん」

ようやく起き上がつて部屋を見渡す。開け放されたカーテンから差し込む春の陽が、淡色のフローリングに光を映している。俺が暮らしているワンルームマンションと同じくらいの広さだが、いま座っているやたら大きいベッドと姿見くらいしかないと、すつきりと広く見えた。作り付けのクローゼットには、古い映画のポスターが貼られている。……ここは誰の部屋だろう。

「ここは……そらくんの部屋?」

「うーん、にーちゃんのへや。さつききれいにしてたよ」

「あ……そう。うーんど……あ、そらくんの部屋はどこ?」

「おれの? こっち!!」

話題に窮してそんなことを尋ねると、小さな手が突然俺の指をガシッと掴み、思いのほか強い力でベッドから引っ張り出された。「ちょ、まつ、あぶな、あぶない!」とオタオタしながら空くんに手を引かれ、ひんやりしたフローリングの廊下を駆け抜ける。生活感のある一軒家だ。階段、洗面所、そしてドアを抜けたらリビングがある。

キッチンに立っていた彩人が、フライパン片手に「おい空! 手え洗つてこいつて言つてんだろ!」と声をかけてくる。だが空くんはリビングとひと繋<sup>つな</sup>がりになつた和室に一直線に飛び込んだ。「ここがねえ、そらのへや!」

「へ、へえ……広いね」

「よんさいになつたたんじょーびに、おれのへやにしたんだ！ いいでしょー！」

「う、うん……いいね」

畳の上にはごちゃごちゃとおもちゃが散乱し、折り畳まれた布団が部屋の隅に寄せてある。鼻の穴を膨らませ、誇らしげに部屋を紹介する空くんの頭上に、『ドヤア』という文字が見えそうだ。

「ほら、飯食うぞ。そら、こっちこいつて」

「えーやだ。いつせーとあそぶの」

「壱成も腹減つてるかもしんねーだろ。それにはほら、今日はお前の大好きなホットケーキだぞ」「えっ!?」

そう言つて彩人が皿の上に乗つた二段重ねのホットケーキを見せると、空くんはあつさりとダイニングに駆けていく。慣れたもんだな……と思いつつ、黒いTシャツにジーパン姿の彩人を、俺は物珍しく眺めまわした。

——中学の頃は、なんかすつごいチャラチャラしたやつだと思つてたけど……

ホストをやつてると聞いた昨晚は、イメージ通りだなと思つた。だからこうして朝からキツチに立ち、器用にホットケーキを焼いて子どもをあしらう姿は、何だかものすごく意外だつた。

「へへっ、そんなに見んなよ。照れんじyan」

「え？ あ、ごめん……。ここ、ご実家だよな？ ご家族は……？ やでも、兄ちゃんて言つてたし……？」

「ははっ、落ち着けよ。とりあえずコーヒーでも飲めつて」

お言葉に甘えてダイニングに座り、コーヒーを一口。普段、ブラックは飲まないけれど、今朝ばかりはその苦味が俺の頭をすつきりさせてくれる。両手でマグカップを包み込んでいると、掌がじんわりと温かい。ようやく人間に戻つた気分だ。

「……空くん、いくつ？ お母さんは？」

「空は四歳で、母さんは二年前に亡くなつたんだ。胃がんが見つかつてさ、そつから早くて」

「それにこいつ、俺とは父親が違うんだよね」

「そつか、どうりで歳が離れすぎてるなど」

「俺が高一の頃に父さん死んでさ、そつから母さん、時々夜の仕事にも出はじめたんだ。……んで、気づけば客のひとりとマジな感じで付き合いはじめちゃつてこいつできたんだけど……結局、相手に逃げられてさ」

「……なんだ」

ちら、と彩人の顔を改めて見つめてみる。昨日は綺麗に整えてあつた栗色の髪は、あちこち毛先の遊んだ無造作ヘア（單なる寝癖かもしれないが）だ。耳たぶにはビアスの穴だけが見え隠れしている。

うつすら無精ひげの生えた下顎に、妙に時の流れを感じる。二重まぶたの形のいい目やスッと通つた鼻筋は昔のままで、実際に顔が良い。が、長いまつ毛に縁取られた目元には疲れが見える。時

刻はまだ七時過ぎだ。あまり寝ていのいのだろう。

「彩人、ホストやつてんだよな。空くん、夜は？」

「ああ……うん。二十四時間保育してくれる保育園に預けてんの。俺の仕事終わってから迎えいくから、連れて帰んのは午前二時過ぎくらいかな」

「……そつ!? そんなに遅いのか!?」

「うん、そーなんだよ。昨日もさ、お前のことタクシーに乗せて一緒に保育園迎えに行つたんだ。寝てる空抱っこして、タクの運ちゃんに手伝つてもらつてお前運んでさー、大変だつたわ」

「ごつ……ごめん！ そんな迷惑かけてたなんて……」

「ううん、いーよ。なんか面白かつたし」

彩人はこともなげに笑うと、椅子に背をもたせかけてコーヒーを飲んだ。その仕草はとても大人びて見え、ほんの少しだが見惚れてしまう。……なるほど、顔の良い男は疲れていても様になる。さすがホストだ。

「ま……俺がもつと頭良けりやさ、昼の仕事で空のこと養えたと思うんだ。でも俺、かーさん死んだ頃にはもうホストの仕事しててさ、こっちの世界の稼ぎに慣れちまつたら、いまさら昼の仕事なんてできねーし。空はこれから金がかかるから、俺が稼がないと」

「確かに、そうだな……」

「……つて、ははつ、再会したばつかなのに、重くてごめん」

慌てて首を横に振ると、彩人はちょっと照れたような顔で笑みを作つた。恋人もいなければ子育

てなど未知の世界である俺にとつて、彩人の苦労は想像することしかできない。

だが、あのやんちゃだつた彩人が、こうして目の下にクマを作りながら弟の子育てを頑張つているのか思うと、その姿は素直に俺の胸を打つた。

「ごめんな。迷惑かけた上に、朝飯まで」

「何言つてんだよ。久々の再会じゃん？ いろいろ話したかつたしさ」

「うん……」

「ねえー、いつせーはどこからきたの？」

「ん、俺？ 俺はね」

丸いほっぺたをさらに丸くしてホットケーキを頬張り、朝のテレビ番組を見ていた空くんが、突然

話に割つて入つてくる。俺が今住んでいる街の名前を空くんに教えると、彩人がちょっと身を乗り出してきた。

「へえ、近所じゃん！ お前は実家出てんの？」

「うん。実家はさ、兄貴が嫁さん連れて帰つてきてんだ。俺、居場所ないからひとり暮らし」

「へえー、そなんだ」

ひとり暮らしなど気ままなものだが、彩人はどのような生活を送つているのだろう。苦労しているんだろうな……としめっぽい気分になりかけたその時、「ごちそうさま！」という元気いっぱいな声が部屋に響く。

彩人に口拭いてもらひながら満足げな顔をしている空くんは、ちょうど始まつた子ども向けア

二メのオープニング曲に合わせて踊りはじめた。

「ははっ、元気だな！」

「まーね。それだけがこいつの取り柄」

そう言つて、彩人は軽く笑つた。笑顔が空くんと瓜二つで、思わず一度見をしてしまう。

だが、彩人の笑顔からはすぐに力が抜け、どこか物憂げな表情になる。眼そうだ。

「毎日、大変じゃないのか？ 空くんもいて夜の仕事とか……ちゃんと寝れでんの？」

「うん、まー、慣れたよね。朝こいつのこと保育園送つて、俺はちょっと寝て、昼からは営業とか

開店準備とか。……店開ける前にもいろいろあってさ、結構忙しーの」

「へえ、馴染みのない世界だなあ」

「だよな）。まあ、変な時間に活動してつからさ、空なんて、家にいるより保育園にいる時間のほうが断然長いわけ。……寝てるこいつ迎えにいくたび、申し訳ねーなって」

「申し訳ない？」

「普通のガキは、家で家族といっぱい過ごしてる時期だろ？ なのに空は親いねーし、ほほほほ俺とも一緒にいられない。保育士の先生たちに良くしてもらつてるから、なんとかやれてるつて感じで……」

「でも、それは仕方ないんじゃないかな？ 彩人はえらいよ。お袋さん亡くなつて大変だつたろうに、子育ても頑張つててさ。すごいことだつて」

「……そつかな」

彩人は俯いて、自嘲氣味に微笑んだ。子育て経験はおろか、セックスの経験さえない俺の励ましの言葉など、どの程度彩人に届いたかはわからないが。

——結婚したいし、家族は欲しいけど……こういう生活見ちゃうとひとりつて楽だなつて思つちやうよな。

己の気楽な生活を思い返しつつ無言でマグカップを見つめていると、不意に彩人がこんなことを言つた。

「なあ……連絡先教えてくんない？」

「え？」

「よかつたら……さ、また遊びに来ねえ？ 俺、昔の友達ダチと会うの久しぶりで、懐かしいつつか……」

見た目の割に遠慮がちな口調で、彩人はうなじを搔いている。その姿も、何だかとても意外だつた。

中学時代の彩人は、もつとチャラくて軽くて明るくて、良い意味でも悪い意味でもバカな男子中学生をやつしているように見えた。彩人を取り巻く派手なメンツは学内でも目立つていて、インポに悩みながら優等生をやつていた俺とは、全く接点がなかつた。

だが、ひょんなことから一緒に実行委員をすることになり、彩人と言葉を交わすようになつてから、俺の価値観は少し変わつた。裏表もなく、誰に対しても人懐っこい笑顔を見せる彩人といふと純粹に楽しくて——懐かしい思い出が、脳内に去来する。

俺よりもずっと友達は多かつたはずだが、仕事のことや空くんのことで、周囲と時間や調子が合はないのかもしれない。そう思うと、何だか放つておけないような気持ちになる。俺はスマホをボケットから抜き、彩人の前に差し出した。

「これ、俺の I.D. また会おうぜ、こんなふうに再会したのも何かの縁だしさ！」

「うん。……さんきゅな」

彩人は安堵したように表情をやわらげて、嬉しそうに笑う。その笑顔は、まるで花が綻ぶようだ。だが、ふとテレビに表示された時刻を見て、彩人が慌てた声を出す。

「あっ、そろそろ保育園送つてかねーと」

「え？ あ、もうそんな時間か」

「そういや壱成、仕事は？」

「通信教育の教材作る仕事。地味だろ」

「ううん、さすが。かしこそーな仕事じやん？ ジヤ、昨日はその接待だつたんだ」

「うん、そう。俺あんま酒飲めなのに、接待多くてさ」

苦笑する俺を見つめ、彩人は頬杖をついて微笑んだ。茶色みがかつた明るい虹彩の瞳は、やはり空くんとよく似ている。心の奥底まで見透かされてしまいそうな、綺麗な色だ。

自分にはない色を持つ彩人の華やかさに、俺はしばしばうつとなつていたらしい。だが、空くんの一言で、はたと我に返つた。

「にーちゃん、うんち」

「おー、行つてこいよ。そろそろひとりでできんだろー？」

「まだむりだから！ ……ねえいつせー、いつしょにいこ？」  
「えつ!? あ、俺で良ければ……」

「おい何言つてんだ壱成はお客様さんだろ！ 悪い、こいつまだひとりでできなくて。……ちょっと待つてて」

「う、うん、ごゆつくり」

手を繋ぎ、トイレに駆けていく早瀬兄弟の背中を微笑ましく見送る。  
開け放たれた窓から、ほんのりと冷えた春風がふわりと吹き込んできた。

それから一週間ほどが経つたが、彩人からの連絡は何もない。

ああして奇妙な再会をした新鮮さから連絡先を交換したはいいけれど、もともと特に親しかつたわけでもないし、これといった用事もないのだから、連絡の取りようもないのが現実だ。

——それに彩人、めちゃくちや忙しそうだったしな……

疲れたように笑う彩人の顔を思い出すと、何か手伝うことができれば良いのに……と思つてしまふ。が、それがかえつて迷惑になつてしまふのではないかとか、じやあいざ手伝うとしたら何をすれば良いのか——それが独り身の俺にはわからない。

次の企画会議に上げる資料を作成しながらふと顔を上げ、ため息をついた。

『壱成って呼んでいい？ よろしくー』

中三の夏休み明け、初めて彩人と口をきいた。当時クラス委員をしていた俺は、なれば押しつけられる格好で文化祭実行委員になつた。そしてもうひとりの実行委員は、ジャンケンで負けた彩人だつた。

彩人は当時から背が高いほうで、ゆるく着崩した制服が似合つていた。今よりも髪の毛は短かつたため、校則を破つて開けていたピアスがよく目立つっていたものだ。

授業中は寝ていることが多かつたし、教師に指名されてもろくに答えることができない。だが不思議と、彩人が失敗しても教師は怒らず、むしろ授業の雰囲気が和むのだ。

一方俺は隠れインポの優等生だつたため、彩人が纏うゆるいモテ男ふうの空気が、あの頃は妙にカンに障つたものだつた。見るからにチャラくてモテそうでヤリチンそうな彩人のことが、ただ単に気に食わなかつたのだ。

だから実行委員と一緒にやることになつた時、俺は内心舌打ちをした。どうして俺がこんなやつのお守りをしなきやいけないんだ、と。

だが思いのほか、彩人は眞面目に仕事をした。裏方できつちり仕事をする俺と、人の心を掴むのが上手い彩人。俺は大勢の前に立つことが苦痛でしかなかつたが、彩人は緊張とは無縁なようで、どんな場面でも堂々としていた。そのあたりは、とても相性が良かつたようと思う。

俺の作った資料を見て、『お前よくこんな細かいことまで考えられんね。天才かよ?』と目を丸くしたり、『塾あんの? ジャー俺が後片付けしとくわ』と手を貸してくれたり。実行委員の言うことなど聞くはずもないだろうと、最初から労働力として数えていなかつたヤンキーたちにも軽く

声をかけてくれた。結果、彼らの実行力がものを言い、とても助かつたことを覚えている。

会議などの後に、ふたりで一緒に帰つたこともあつた。

彩人はおしゃべりで、俺に対する質問も多かつた。自分に関心を抱いてくれているのかと思うと悪い気はしなかつたし、彩人といふと会話が弾んだ。思春期の悩みを抱えていても、彩人と話していると楽しかつた。

煩わしく感じていた文化祭が終わつてしまふことを、寂しいとさえ思った。

何もなければ、彩人は俺のような人間と親しくはならない。文化祭という目標があるから一緒に過ごせているけれど、それが終わればあとは受験。彩人とは、進む道が違うのだ。

彩人はあの頃のまま、あつけらかんと生きて行くのだろうと想像していた。

それがまさか、息子と言つても差し支えないほどの年齢の弟を、ひとりで育てようとしているとは……

ふと、デスクの上に置いておいたアメの包み紙が目に留まる。あの日の別れ際、空くんがくれたものだ。

——空くんのことも、気になるしなあ……

早瀬兄弟の生活が、一般家庭的な暮らしぶりではないことは確かだ。俺自身も話を聞いた時は、空くんのことを『かわいそう』だと感じた。だが、家庭の事情はそれぞれで、部外者がとやかく言う筋合はない。それに、空くんは健やかに成長している。

彩人の店は日曜が定休日で（一般的に、日曜定休の店が多いらしい）、つまりは週一日しか休み

がない。丸一日でも眠つて過ごしたりそういうものだが、空くんは遊びたい盛りの四歳児だ。  
それなら、彩人はいつ休むのだろう。……そんなことを考え出すと、やはり気になつて仕方がなくなる。

「うーん」

キーボードに手を置いたまま唸つていると、隣の席に座る同期の小田行輝おだゆきてるが、メガネを押し上げつつこっちを覗き込んでくる。小柄で身体の線が細く、神経質そうな顔立ちに銀縁メガネ。俺はいつも、小田を見ていると針を連想してしまう。

「どうしたんだい？ 行き詰まってるの？」

「えっ？ いや、ごめん。うるさかつた？」

「ううん、君が悩んでんの珍しいなと思ってね」

「そーカなあ」

「霜山くんって仕事早いし、先生たちにも気に入られてるからさ。いろいろ楽勝だろ？」

「……や、そうでもないけど」

好青年っぽく見えるらしい外見と愛想の良さも手伝つて、確かに監修の先生方とのやり取りはスマートだ。年上受けのいい人懐っこい笑顔や、社会人になつてから身についた軽妙な営業トークが役に立つ。

だが俺とて、顔とノリだけで世渡りをしているわけではない。ほど良い関係性を維持するための努力もしているし、気疲れで時折胃痛を起こすほどなのに。

加えて、今は有名進学塾『ステージクリア』（略してステクリ）とのコラボ企画が進行している最中だ。これも俺が営業先でプレゼンをし、獲得してきた仕事である。

教授受けがいいから、営業が上手いから、といろいろ仕事を任されるのはいい。だがたまには勞つてほしいものだ。

「あ、今度ステクリの塾長さんの接待だよね？ 店は決まった？」

と、何気ない口調で小田が言う。俺はやや不愉快な気持ちを腹に抱えつつ、「いーや、まだ」と返した。

「女塾長さんだからなあ？ どんな店がいいんだろうね。まずはいつもの料亭として、その後が肝心だ」

「小田が決めてよ。俺、あれくらいの歳の女性の気持ち、よくわかんないし」「いや僕もわからないよ」

「前、英誠大学の女性教授の担当してたろ。その経験を生かして……」

と言いかけて、俺ははたと黙つた。

小田は書類仕事は早いけれど、空氣の読めないところがある。そのせいで、何かと扱いの難しい女性教授を相手にいろいろと失言をやらかしているのだ。つい先日も、研究室に出禁を食らつたばかりで——案の定、俺の言葉に反応した小田は、それこそ針のよう銳い目つきでこちらを睨んでいた。

「僕の経験なんて何の役にも立たないさ。でも霜山くんはモテそудだし、女友達に聞いてみたらどう

うだい？ 熟女が好きそうな店のひとつやふたつ、あつという間に候補が上がるだろ」

「……んー、そう言われても」

——いやいやいや、モテても意味ねーんだって。モテたってその先進めーんだから。

小田の台詞せりふがちくちくと耳に痛い。モテたところで何の役にも『勃』たない己の分身について嫌味を言われた気分になり、俺は密かに自暴自棄に陥った。

それに、小田はあくまでこっちに仕事を押し付ける気でいる。接待の店選びからの予約作業など煩わしさしかないのだが、いまいちまだ勝手のわかつていない後輩たちに頼むのも怖いものがあるし……などと考え出すと、それならばさつさと自分がやつてしまおう、というところに落ち着く。

——くっそ。結局俺がやんのかよお……

悔しさと切なさと心細さに歯噛みしつつパソコンに向き直ったその時、はたと彩人のことを思い出した。

彩人の勤務するホストクラブは、高級感重視の落ち着いた店だと言っていた。ホストの年齢層も広く用意されていて、年上のイケオジにひたすら甘やかされたい女性に人気がある——彩人は雑談の中でそう語り、別れ際に名刺をくれた。

「あー……いい店あるじゃん」

「ん？ 本当にかい？ ヘえ～さすがは霜山くん」

「塾長さんが気に入るかわかなないけど……まあ、ちょっと予約いけるか聞いてくわ」

いいタイミングで、彩人と連絡を取る口実ができた。やや口元を緩めながらスマホを操作しばじ

めると、横からじつとりとした視線を感じる。見ると、なぜだか小田が面白くなさそうな顔をしていた。

「……なに？」

「別に。いやあ、やつぱり頼もしいなあ霜山くんは」

どこまでも嫌みつたらしい口調に腹が立つけれど、そんなことはどうでもいい。時刻は午後三時で、もうそろそろ家を出ている時間かもしれない。あの日、空くんを保育園に送る道すがら、いろいろと彩人の生活について話を聞いたのだ。

ホストは夜の仕事だから、昼間は暇なのではと思い込んでいた。

しかし、開店前に行うミーティングはしっかりと時間をとつて行うし、お客様メールを送る作業、身嗜みみだしなを整えるための時間などなど、なにかとやることが多いらしい。

特に、彩人の勤務する店は高級感を大事にしているため、ナンバー入りしているホストたちの装いには相当うるさいとのことだ。

彩人はナンバー3の座に就いているらしく、毎日ヘアメイクを行うことはもちろんのこと、体型を保つためにジムへ通うことも義務付けられている。もちろん、店が金を出すという。

高級ホストクラブでナンバー3、ということころには素直に感嘆した。

すると彩人は照れくさそうに笑って、『俺、愛想だけはいーからさー』と言った。ナンバー上位ホストはヘルプ担当の若いホストたちの育成にも力を入れねばならないらしいが、この間の様子だと、彩人は若者からも慕われているのだろう。

オーナーと一部の古株スタッフは、空くんのことも理解してくれているという。のっぴきならない事情で彩人が店を早抜けすることもあるが、大目に見てくれているのだとか。その恩に報いるためにも、もつと努力して売り上げを伸ばせるようにならなければ、と彩人は意気込んでいた。

仕事にやりがいを感じている彩人の横顔は、中学生の頃と変わらず清々しい。家庭のことで苦労している間も、性根の部分は変わっていないのだということがわかつて、俺は何だか嬉しかった。

彩人の瞳の色を思い浮かべながら、簡潔にメールを送った。そわそわと腹の奥が落ち着かないような気分である。

「ねえ、どうしてニヤニヤしているんだい？」

「……えっ？ 誰が？」

「霜山くんだよ。ああそりゃ、彼女か何か？ 仕事中に私用メールはいただけないな」

「ち、違う違う！！ 友達だよ！ 店のこと……」

「ふうん。顔がゆるいから、てつきり女かと」

小田は相変わらず不機嫌そうな横顔だ。高速でカタカタとキーボードを叩く音がやたら刺々しく、向かいに座る女性社員がちらちらと気にしている。新卒で入ったばかりの郷田菜々子だ。こちらの会話も丸聞こえだつことだろう。

俺は軽く咳払いをして、頼みにくいことを伝えておくことにした。

「郷田さんも塾長先生の接待、ついてきてね」

「……はいつ？ なんで私も？」

「なんであつて、先生にはこれからもいろいろと世話になることもあるだろうから、きつちり顔を繋つないどかないと」

「でも……若い女が一緒に行つて大丈夫ですかねえ。あの先生イケメン好きで有名でしょ？ 気分を害されたりしませんかね」

「大丈夫だよ。それに、先方が気分を害さないように頑張るのも仕事だから。ね！」

「……はあい」

念を押すように、やや圧を込めて笑みを見せると、菜々子はほんのり頬を染めて頷いた。

すると小田が、ひときわ強くエンターキーを叩きはじめたではないか。カタカタカタ、ターン!! カタカタカタ、ターン!! というやかましい音が耳に突き刺さり、俺は苛立ちに引きつった笑みを浮かべつつ、菜々子と軽い打ち合わせをした。

コラボ企画の件で忙しない日々が続いていたため、彩人と会えないまま接待の日となつた。だが、詳細についてはメールで打ち合わせ済みだ。

『ステージクリア』の企業理念、迫田が海外の有名大学を出ていること、中学高校と女子校出身であること。さらにはバツ2で男に失望していることや、最近ホストクラブに関心を抱いていること、好みの男のタイプなど……これまでの会話、塾のスタッフらとの雑談から得られた情報を、彩人に情報提供了。

スパダリホストと溺愛子育て始めます 愛されリーマンの明るい家族計画

細かくメールしておいた。

彩人からの返信は短かつた。『老成、相変わらずだな』と、『了解、あとは任せといて』というものだけだ。たったそれだけのやり取りだが、なぜだか彩人に任せておけば全て上手くいく気がした。

こういう感覺は初めてだ。俺は普段、接待や大事な仕事の前はいつも、必要以上に細かなことが気にかかるてしまう。こういう自分のメンタリティには<sup>へきえき</sup>辞易するが、もともと完璧主義などころがあるため、気が抜けない。

そして当日、俺は後輩の郷田菜々子を伴つて、迫田を京懐石料理の店へと案内した。

普段から派手な服装を好む迫田だが、今日は春らしいピンク色のツイードスーツに丸っこい身体を包み込み、あえて白に染めているという豊富な髪をゴージャスに巻いて現れた。気軽な調子で手にしたバーキンはしつくりと様になつてゐるし、御年五十八の御婦人が履くにはいささか尖りすぎではないかというようなハイヒールも、彼女にはよく似合つてゐる。

会議の時よりもぐつと派手な装いで現れた迫田に、菜々子はすっかり怯んでいた。

序盤は完全に引きつった笑みと上滑りするトークを展開していたため、俺はひたすらフォローだ。先輩は後輩をフォローするために存在する生き物なのだ。その甲斐あつて、なんとか和やかな食事となつた。

そして、緊張のあまり必要以上に出来上がつてしまつた菜々子が『じゃー先生、これからイケメ

ンい一つぱいいる店行きましょーね!!』と盛り上げて——いい雰囲気と流れで（多分）、彩人の店へと場所を移すことになつたのである。



彩人の勤務する店の名は、『Sanctum』<sup>サンクタム</sup>という。

一步踏み込んだ夜の街は、まばゆいほどの光と欲望に溢れていた。

細い道路と、雑多に行き交う歩道を挟んで、よく似た形状のビルが連なる中、一際黒く艶めくビルが見えてくる。細長いフォルムのスタイリッシュなビルで、外壁は全てガラス張り。夜のネオンを鏡のように映すビルの一階に、『Sanctum』という英字が流麗なフォントで記されている。  
「ほわ～これがクラブか～。え、こい？ いじで霜山先輩の友達が働いてらつしやるんですか？」  
「うん、そうだよ」

「ハア……すごいわねえ。あたし、ホストクラブつて入るの初めてなんだあ。ずっと興味あつたんだけど、なかなかねえ。ほら、入るのつて勇氣いるじやない？」

「わかります、わかりますよ先生!!」

酔つてはしゃぐ菜々子と並んでビルを見上げる迫田の瞳はすでにキラキラと潤んでおり、期待のこもつた眼差しだ。

俺はにこやかに、「僕もホストクラブは初めてです。僕だけ追い出されたらどうしましよう」な

どと軽口を叩きながら、ドアを押し開く。するとその奥には、ワインレッドの絨毯が敷かれた長い廊下があった。壁には額装されたホストの写真が等間隔に並んでおり、まるで美男子を飾る美術館のようだ。

「うわ、うわ、イケメンばかり〜!! ねえ先生、どんな子がいいです? わたし迷っちゃう〜」「そうねえ……あたしはもうちょっと熟した男のほうがいいわねえ。ねえ霜山くん、もつと年嵩としかさのホストもいるつて言つてたわよね?」

「ええ、もちろんです」

彩人の話によると、この店の最年長ホストは四十五歳だ。なんでも、別の店のオーナーをやりつつ、『sanctum』で現役ホストもやっている強者で、しかもナンバー入りを果たしているとのことだ。一体どんな働き方をしているのか……と、一般人の俺は首を捻るばかりである。

女を誘うような目つきで、カメラを見つめるイケメンたち。入り口に近ければ近いほど入店間もないホストであるらしく、俺の目にも若さや粗さのようなものが見て取れた。中には、あの夜俺に絡んできた若い男の顔もあり、不思議と懐かしいような気持ちになる。

その時、壁に飾られた彩人の写真を見つけた。

落ち着いたブルーの背景の中、軽く顎に手を添えて微笑む彩人の姿がある。キメ顔で唇を吊り上げている彩人はやはり実に顔が良く、思わずしげしげと見入ってしまった。

「先輩? ま、まさかその人が、お友達の?」

「ああ、うん。そうだよ、この人」

「エツ、えー!! 超絶カッコいいんですけどおお!! なんで? なんでこんなイケメン友達なんですか!?」

「中学時代の同級生なんだ」

「うわ〜マジで? こんなイケメン学校にいたらどうしよう。ねえ先生!? ねえ!」

「こら、言葉遣い!」

女性ふたりがキヤツキヤと盛り上がりはじめたところで、スッと観音開きのドアが開いた。ビロード張りの重たげな扉を開くのは、壯年の黒服たちだ。顔立ちちは地味だが、立ち居振る舞いがキビキビとして格好が良く、執事のような雰囲気である。

「霜山様、ようこそいらっしゃいました」

「え? あ、お世話になつております」

いきなり名前を呼ばれてぎょっとするも、彩人が話をつけておいてくれたのだろうと気を取り直す。

というか、ホストクラブの出迎えはこんなにも静かなものなのかな。もつとチャラチャラとハイテンションショーンな感じで、『お客様ご来店でツツす!!』『イラッシャセ〜〜!! (全ホスト)』など、派手に歓迎されるものと予想していた。だが、思いのほか落ち着いた対応でホツとする。

内装も、もつとド派手でギラギラしたもの想像していたのだが、シックな雰囲気である。広い店内の中心には円形のステージがあり、その中に、モダンなスパイラルシャンデリアが飾られている。流水をイメージさせる形状ながらも、どこかあたたかみのある色味を放つシャンデリ

アの明かりと、壁をほの明るく照らす間接照明。そのおかげで、クラブ内には落ち着いたラグジュアリー感が漂っていた。

席はほぼ客で埋まっている。ジャージーなBGMとあいまって、ほどよい賑やかさだ。

奥まったソファ席に案内されながら軽く客層をチェックしてみる。年齢はさまざまだが、いかにも金を持つていそうな、身なりのいい女性が多い。

数人のグループで訪れている中年女性たちや、美しく磨かれた指先でシャンパングラスを傾げつつ、年上ホストに甘える若い女性、中には和服を身に纏つた老婦人などなど……どこを見回しても、男客は俺くらいのものだ。完全に浮いている。

緩やかなカーブを描くソファ席に腰を落ち着け、黒服から店の利用システムなどの説明を受けた後、「なんか緊張しますね」などと言っているところに、覚えのある香水がふわりと香った。

振り返ると、彩人が華やかな笑みを浮かべて立っていた。

「ようこそ、『sanctum』へ。アヤトと申します、初めまして」

彩人はナイトよろしく膝をつき、優美な動きで迫田と菜々子に名刺を手渡した。ちょうど男本（指名するホストを選ぶためのカタログのようなもの）をペラペラめくっていた菜々子が、「いきなりナンバー3キタアア!!」と色めきだつている。

——うお……すごいな。

クラブの雰囲気に気圧されているせいなのかなんなのか、いつぞや道端で再会した時よりもずっと、彩人の美貌が際立つて見えた。

ホストクラブというきらびやかなステージに立ち、ホストという役を演じている彩人の表情は、四歳児の育児に疲れ果てた男には到底見えない。余裕に満ちたその横顔は、とても頼もしく思えた。すらりとした体躯によく似合う細身のブラックスーツに、黒に近いワインレッドのワイシャツ。彩人が身に纏っているものは全てしっとりとした光沢があり、高級感に溢れている。『高そうな男』だな、と俺は思った。

感心しつつ見惚れていると、彩人がするりとこちらに視線を向け、唇を吊り上げて意味ありげに微笑んだ。

ヘルプとして伴っているのは、いつもや俺に絡んできたウルフカットの若いホストだ。もらつた名刺によると、彼の名は『如月レイヤ』というらしい。実にホストらしい名前だ。

「迫田先生、そちらに座つてもよろしいでしようか？」

「えつ？ え、ええ、どうぞ」

「失礼いたします」

レイヤは菜々子の隣、そして彩人は迫田と俺の間に腰を下ろす。レイヤが「一杯お作りいたしましたね」と酒を作りはじめる中、彩人は優しい口調で迫田に語りかけはじめた。

「壱成から、先生のこといろいろ聞いていました。想像通り、知の方ですね」

「あら……そうお？」

「ええ。組織を率いておられる女性って、強さと凜々しさで輝いておられますよね。僕もあなたのような先生から学んでみたかったなあ」

「ふふつ、やあねえ。さすがにお世辞がお上手。でもあたし、厳しいわよ」

「ははっ、いいなあー。先生のような美人教師になら、いくらでも厳しくされたいですよ」

彩人がにつこり砕けた笑みを浮かべて見せると、ぱあつとその場が華やぐようだ。

迫田は『まだ警戒心は捨てていない』といわんばかりにピンと背筋を伸ばしているが、瞳の表情は正直だ。俺に見せるものとは比べものにならないほど、甘くどろけはじめてる……

そしてものの五分ほどで、彩人に何か囁かれたたび、迫田はまるで少女のようににかんだ笑みを見せはじめた。あつという間の出来事に、俺は目を丸くするばかりだ。その向こうでは、菜々子がレイヤを相手にきやぴきやぴとはしゃいでいるし……

——あれ？ 俺、ここにいる必要なくね……？ と、虚無に陥りかけながらも、彩人の代わりに迫田に水割りを提供する。こんなところで居酒屋バイトの経験が生きるとは。

そしてあれよあれよという間に、迫田は「もー今日はアヤトくん指名！ ボトル入れちゃう！」と盛り上がり、この店で一番高い酒を頼むと、仕事で見せる厳しい顔や声からは到底想像もできないほどに甘つたるい声で彩人に甘えはじめた。

突然露わになつた迫田の『女の部分』を目の当たりにし、俺は見てはいけないものを見てしまつたような気分になる。視線はひたすらグラスに向け、新米ホスト顔負けの生真面目さで、カラカラカラカラと必要以上にマドラーを回しまくつた。

たつた三十分ほどで、迫田は彩人に一体いくら金を使つただろうか。テーブルの上には洒落たオーデブルやフルーツの盛り合わせがずらりと並び、テーブルにつくホストの人数も増えている

る。……ますます俺は帰りたくないつた。

だがその時、最初に俺たちを出迎えた壯年の黒服が、そつとテーブルの片隅にやつて來た。そして意味ありげな視線で彩人を見つめ、そつと頷いて去つてゆく。

彩人は、迫田の耳元で「ちょっと待つててくださいね、先生♡」と低く囁き、完璧な笑顔を一ミリも崩さず立ち上がる。そして、バックヤードへと姿を消した。

衣装替えでもしてさらに場を盛り上げるのだろうな……などと考енаがらひたすら真面目に酒を作つてはいるが、ヘルプのホストたちが「次、菜々ちゃんに焼酎お湯割りね」などと普通に声をかけてくるではないか。なぜ後輩のために酒を作つてはいるのだろう——と、俺はどうとう虚無つた。

だがその時、焼酎のボトルに手をかけた俺のそばに、さつきの黒服が音もなく忍び寄つて來た。そして小さな声で、「アヤトさんがお呼びですので、こちらに」と囁く。

「え？ 俺にですか？」

「はい、大至急とのことで」

「わ、わかりました」

接待のことで何か問題でもあつたのだろうかと、気配を消して席を立つた。三人のホストを相手にすつかり気分が良くなつてゐる迫田は、俺の不在になど気づくこともないだろう。

綾帳を思はせる重たいカーテンの向こう側には、薄暗い廊下が伸びていた。そしてその壁際に、スマホを手にした彩人が佇んでゐる。ディスプレイの明かりに照らされた彩人の青白い顔がぼんやりと浮かび上がつていて、不気味だ。

「お疲れ、どうしたんだ？ 先生、すっかりお前のこと気にいつちやつて……」

「壱成……!!」

「ん？ ……わ、ちょ、何!?」

青い顔をした彩人に、突然ガシッと肩を掴まれる。急に距離を詰められたことに驚きつつも、切羽詰まつた彩人の様子に気づき、俺は首を傾げた。

「どうしたんだよ？」

「そ、空が……保育園で怪我したって連絡あつて……」

「えつ、怪我!? 何があつたんだよ!?」

「詳しいことはまだ……。どうしよ、怪我なんて初めてなんだ。でも、でも今抜けたら、お前にも迷惑かけちやうし……っ」

「彩人」

薄暗がりの中できえ、彩人の顔色が蒼白であることがわかる。

俺は迷わず、彩人の腕を力強く掴んだ。

「彩人、俺が保育園に迎えに行くよ。だからお前は、先生の相手を頼む」

「……で、でも、お前いなくなつたら、接待の意味……」

「大丈夫。郷田がいるから大丈夫だ。それに、俺いる意味ねーなつて思つてたから、平氣だよ」

「壱成……」

「俺が事情聞いて、お前んちに連れて帰つとくから。先生と郷田のこと、くれぐれも頼むな?」

「……うん」

不安げに揺れる瞳を下から覗き込みながら力強くそう言うと、彩人はぎゅっと唇を引き結び、こくりとひとつ頷いた。

「えつ……いつせー？ わあ、いつせーだあ！」

「空くん……!? その頭……」

『空が怪我をした』と彩人がひどく動搖していたため、俺はタクシーを飛ばし、急いで保育園へとやってきた。

俺を見つけるやいなや、パジャマ姿で飛びついてきた空くんの頭には、ぐるりと一周包帯が巻いてある。

思わず「どじどじどうしたの頭!!」と派手にうろたえてしまつたが、空くんは意外と元気そうだ。「ねーなんで!? どうしていつせーきたの!? にーちゃんのかわりなの?」と、二度目の出会いにしては懐いてくれている様子にホッとする。彩人恋しさに大泣きされるのではと、若干不安を抱いていたのだ。

「あなたが早瀬さんの代理の方ですか?」

空くんを抱っこし、俺は若い女性保育士と向かい合つた。胸に『あいこせんせい』いう可愛い名札をつけた保育士は、当然のごとく謝しげな表情である。

「ええ、そうです。早瀬はどうしても抜けられない仕事の最中でして、私が代わりに」